

軍用記

和書門			
一七二八〇	函	架	冊
一七二八〇	函	架	冊
七	冊	架	冊

内閣文庫			
一七二八〇	冊	架	冊
一七二八〇	冊	架	冊
五	冊	架	冊

武備

内閣文庫	
番號	和 17280
冊數	7 ( 3 )
函號	154 3



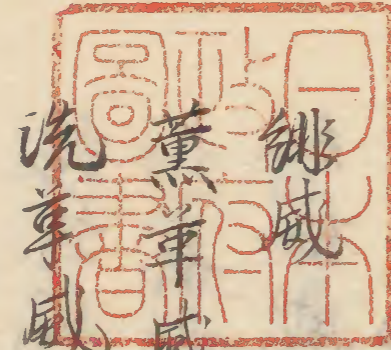
綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり

軍用記 才三

目錄

淺草毛大意 六ヶ条

草威之部



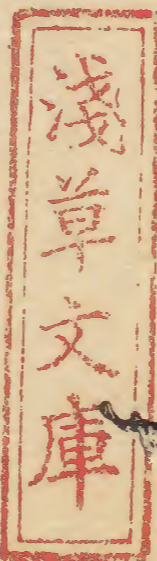
洗草威

小櫻威

藍白地勇邊

赤草黄糸

淺草毛定法 九ヶ条



黑草威

赤草威

筋縄目

小櫻黄邊

品草威

後威之部

唐後威

練緯威之部

練緯威

糸威之部

紅梅威

白糸威

赤糸威

紫糸威

藤威

褐之威

多花威

捏鳥威

色之威

紅裳濃

紺裳濃

付 紺裳濃之事

妻白

肩白

腰取

大荒圓之部

後威之部

唐後威

練緯威之部

練緯威

糸威之部

黃糸威

黑糸威

萌木糸威

紺糸威

赤糸威

沃浮威

教目威

紅裳濃

耳裳濃

黃檀白

肩白

付 肩白之事

妻取

大荒圓之部

大荒目

金更大荒目

鉄洞之部

鉄洞 加洞

相生相剋

菱鏡板

離物

看長

仲鋸鐵威之紋

後卷系部

尚世具足部

腹當

袖強

具足之守

澄石吉方

河曹役人

馬嘶其部山北之免禁

大将の河鏡玉忌

武具之字用

三枚草大荒目

一枚更大荒目

包洞

四姓鏡

威縮

鏡延

具足

昔々之尚世具足

洞丸系部

鉄洞圖

鉄鉢

笠下

澄ノと云詞

河澄石次方

曹乃石鏡

人之鏡玉見

甲曹之字訓

軍用記 才三

後威毛の大意

- 一 威毛とふ事威ハ融乃目とをともを云也毛と云ふハ札を綴たる糸のあゝひはくたうたるが毛をよせりやくふれハ毛とハふ也毛と云ふも同く也事威後威の糸も同例也
- 一 後威の威毛の色目ハ一條院御代此書見せり保元平治の御諾より以來代々の軍物御よき此威毛の名見しうや
- 一 楠正成ハ全別山の陣の誓書に申書ハ札サよきを以てようときをを好むしはくたうたうけおもれをわくくハ合戦の用ハ是る

一威毛を好むハ益の事之物也とも 賦き田支野人とも  
初後之をハ女ハ人々もよく見ゆるや弱武も後之威毛  
よかきしれと哉あふさよとほのげもあししよとや後武も  
のそあやふおさるのいひくさ満くもいさあさるもみゆ  
へし何きやも敵の眼をわくし氣さうをい我勇威成たを  
くまの徳あるあれことをかさけとあふま一途は益の事  
ともあさくは楠の羽ハれあきと急了をすくとそ威毛の  
さうのそを好むさういさうめする羽あさき

一後之威毛のそあやうあさきとそ敵の目を付くはては  
とそ流何りさるあきか敵あつたれに武をよと  
目と付け初るもまんこそ武士の面目あさるは敵は  
初るハさきをさるし思ふ戰場（あま）もあさき  
て初るあさきとあつて休くさきあさきとそ何あさきか  
とそ何りさるよき徳あけ武をある（ル）也

一威毛の事とそ初り初げ何あさきハ古何天皇或ハ何り  
何りしと益工も威させ何方の戦は初るハ何り始るあさき  
そ中集を集くの（た）流いさうも何り皆平さき古あさ  
るそさ（さ）るるわそ初る初めしなる初之初（さ）し  
一は何さる威ハれハ何の形は初る何さあさき何さの系  
あそあさき何さの耳系と（さ）るる初る初めしなる初之初（さ）し







一 糸の緋威と云ふ糸の字を付て糸緋威と云ふ紅威と云ふ  
も緋威の事也

一 黒草威と云ふ黒草を以て威しと云ふ

一 海草威と云ふ海草を以て威しと云ふ

一 赤草威と云ふ赤草を以て威しと云ふ赤草ハ茜を染る草也

一 緋の草ありハ之を以て緋と云ふ

一 洗草威ハ洗草を以て威しと云ふ洗草ハ落葉を染る草也

一 洗草と云ふハ緋色の草を以て洗草と云ふ也

一 ありたるごとくあり放りて草と云ふ也

一 何れにありては草ハ葉を以て草と云ふ也

一 筋繩目威ハ 据繩目 据索目 伏繩目 伏索目 ありて威す

一 之類ありては草ハ白と赤とと緋の間にありたり

一 染る草ハ草を以て染る草と云ふ也

一 のまゝありては繩の根ハ元也

一 之威ハふりてありては威ハありては限る也

一 ありては威の草の事



一 小極草威又畧して小極威と云ふ也

一 之威ハ小極草ハ藍地ハ白く小極草の花形を染出たり

三色のまじり  
けりては  
曲りては

草に糸威より少極威より少威毛ハあき之草威斗之

小極草の圖



一 少極と多は返したる程と云ハ少極草を萌本地にして極

の花と多は漆する草をわわらるる程と云ハ返とハ右

の藍地白紋の小極草を多は漆する程と云ハ返とハ右

返とハ地をわらるる程と云ハ返とハ右

威よりハけあき草威むらり之

一 藍地と多は返したる程と云ハ返とハ右

草と右の小極草を多は漆する程と云ハ返とハ右

たつと云はも糸威よりハあき草威むらり之



小極と多は返したる程と云ハ返とハ右

一 品草威又此奈草威とも云く之草の藍地は白く齒原の

葉を二枚向ひ合せその方をあきく之形凡クあきく向ひ

合せたる故をさげく深し草之條之齒原草と云ハ又那草

紫名草かきく書ハ志草あきく書ハ志草あきく書ハ志草

羽下付て雨の字を假り用ひ又此奈とも書ハ



後威之部

一唐綾（とろろ）と云ふものより御りたる綾と細く裁ち當りたる重箱  
て糸威のこもり威をこもり糸威と云ふも何れも何れのかうあや  
かきしと云ふし（とろろ）の重箱のうらやまを細くたるを何れもたる綾  
かきし舊紀おもひたる糸威と云ふも何れも何れのかうあや  
きここれ忘れたるものも心持遠りたるを何れも何れも

練緯威之部

一練緯威ハ練緯を厚く細くたるも重箱を威と何れも練  
緯威と云ふしと云ふは振る好も重箱を練緯と云ふは練緯  
と云ふは重箱を威と云ふは重箱と云ふは練緯と云ふは練緯  
と云ふは重箱と云ふは重箱と云ふは練緯と云ふは練緯

糸威之部

一紅梅威黄糸威白糸威黒糸威赤糸威紫糸威緯  
糸威等別の子細あり各々之の糸めりたるも  
一藤威と云ふ後色糸威と云ふす糸の糸少て威を之後色糸威  
と云ふ長くしていひやくき放畧して威と云ふは黄糸威と  
いふと畧していひやく威といひ小梅威と云ふは小梅威と  
いふと畧していひやく威といひ小梅威と云ふは小梅威と

一黄檀威と云ふはとろろの糸少て威を之とろろと云ふは黄と赤

と云ふはとろろの黄檀の二字をとろろと云ふはとろろの糸一色ハ

て色の本とし云葉は枝も漆の木の似たり秋の葉も葉の何の  
葉を考ふはあきさしなる糸の如くは紅の如くは和歌  
よはしむちりともむはけ事之秋の如く糸の如くは  
葉を正似せし漆をさししと云ふなり

一 褐<sup>カッパ</sup>或ハシウ糸の糸を感てりうらさともうら色とも云故  
猶としかるめれ外して軍陣の如く用る事なりらんさとも云  
何やまうへ褐を藍を濃くして緋よりとも濃く思ふなり  
たるまへ古高は 漆を志る糸のうらさとも云ふなりぬれ  
てさこそ我思ひ家 又我意なる糸のうらさとも云ふなり  
たのてこそこそハ志る糸のうらさとも云ふなりぬれ

那尔南野の里やうらさとも云ふと能漆り故志る糸のうらさとも云  
おとありしと云おげさとも云と云ふは心ゆく事なり  
より褐<sup>カッパ</sup>布とも毛織の布を薄くする糸の布の色も似たり  
褐色とも名はけたりと云ふは是なり

一 糸緋感ハ緋といふや感てる糸の中にもささく緋ハ紅花を  
漆を緋感ハ糸を記さるとは草感切ん草の緋感ハ油さ丸ぬ  
る糸の字を付て糸緋感と云ふ糸感ハ草漆の糸を故  
緋感れとも云花やうらさとも云ふは是なり

一 糸花感ハ白糸と云ふ糸を感てる糸の白花の色も本は是なり  
と云ふは白糸と云ふ糸を感てる糸の白花の色も本は是なり



一 一目威ハ二色の糸を以て袖系掛りの色ちりひよ志きりのめとを  
 てらるを替て威を之白と紅を凡ハ紅の一目の程をさる云あり  
 は即ち唯しを知し志の程めといふるを思ふも志きりのめ  
 と云又志きりのめを略しとあきめと云えされハ志き先六ト限  
 間と云くさるめれども目つきて一目より書集を云

志きりの  
 の糸



一目威ハ五糸一色と威を之集りて威たる也其の教と  
 定ありとの物も定あり其糸を集りて威たるもよるるく白と赤  
 志中よりたすもあきり又陽の色を  
 白なりともあきり人々々の糸をさる也  
 志死るるも右糸をさるもあきり

一 色々威ハ五糸一色と威を之集りて威たる也其の教と  
 定ありとの物も定あり其糸を集りて威たるもよるるく白と赤  
 糸とば糸をさるも木黒と針糸とを並色ハ五日めを奪て

何さやうなるしよと云うもぬれり糸をさるし一綱をさる也

一 紫糸濃ハ  
坐落 坐落

明ハ落付糸之袖系掛上ハ落付糸中々

中ハ系下ハ巾系之正を積之濃く一脱か上と針糸一して其を針糸と

一 紅糸濃ハ綱ハ落付糸袖系掛上ハ落付糸中ハ中紅下ハ巾糸

正を積之正色一  
 一脱か上と針糸一して其を針糸と  
 ひと色正色正色一  
 ひと色正色正色一

一 耳糸濃ハ耳坐落 耳ハ袖系掛の正糸のあきり 耳正色濃の

也濃ク正色と云ふハ何色にもあは耳を正色と濃く正色と云ふハ

針糸濃ハ綱ハ花田色之袖系掛上ハもあきり中ハ濃ク花田色

巾糸針糸  
 針糸何色の正色一して針糸ハ正色と針糸中と針糸正色と針糸  
 巾糸正色を用て針糸正色一して針糸ハ正色と針糸中と針糸正色と

巾糸針糸

一 色を濃ハ何色の中もあつし何色も上とを色くすくすくしとを  
とを濃くは多くして既よとを濃ハ此等と見と知を色濃の  
は限るゆへと云い何れもあつし何色の中も何れもあつしと見え  
し知多き

一 黄檀白の濃と云は上とをたつと色の赤やと  
たつと云ふは 袖等

ゆりの末と黄檀を併して又黄檀とす黄檀を威と云ふ

一 萌本白ハ上と萌本を併して神等ゆりの末とすも萌本  
しと又黄檀を上よりし松すき黄檀とすも此也

一 妻白と云は白とハ神等物の白物と云也神等物の白物と  
色くすく威し是も物と濃と云はしと神等物の白物と  
しと黄檀とを併し松すき黄檀とすも此也

一 肩白と云は袖のこの方を白や威とハ神のこの方を濃と  
と云はしと上より二段めの中と云はしと又この一段と云はしと  
あはし色何れもあつし肩白と云はし肩白の肩の字がしとハ  
の白すしと云はし也肩白と云はしと云はしと云はしと云はしと  
事と云はしと云はしと云はしと云はしと云はしと云はしと云はしと

一 肩白妻白の麴と云は白と云ハ沉香薰物と云の香の  
物の黄檀のくとうりて末ハ既とすくも物ハ口は焼み  
おしと云はしと云はしと云はしと云はしと云はしと云はしと云はしと  
と色くすくあつしと云はしと云はしと云はしと云はしと云はしと云はしと









一 離物シと云事 桐の威毛と龍の威毛の色違ふと云

一 龜カメ定ツと云ハ 澄の桐の射向の程をさつひわくはあやましく  
しより長古の澄のことく射向の程をさつひわくを  
のつけあまぬひの(と云)

一 澄と云せ長と云るハ 大将の御澄ハ 照るるへと云あを遊ユ之

平侍のともきつせと云と多也 大将ハ 在沙の字と云(と云あを遊ユ之

と云りきせと云ハ 澄の御名ハ 桐地腹巻と云ハ 昔ハ 龍ハ 澄ハ

と云らうも云ハ 故也と云也 昔ハ 書ハ 又 振也

の(と云)をさつひわくと云るハ 人なりやあやましく

一 具足と云ハ 澄の(と云)をさつひわくと云るハ 又 振也

と云也 射向具足 樂器の具足 佛前の具足 なること云

取揃と云ハ 具ハ たるに云と云ハ 字ハ 是ハ たるに云と云

物を取揃ひつひのあきを具足と云 澄ハ 神といはたてし云と云

尚且御取揃ハ 故也 具足と云也 軍陣の具足と云事也 一説ハ

大将の御澄と云 平侍の具足と云 又一説ハ 昔の御澄と

云 尚世の御具足と云と云 一説ハ 何れも非ハ 謙倉年中

行事 御澄 白糸 是ハ 被管中ノ宿老二人ニテ 持テ 出ル

時役ノ出向テ 上手勤スル人 御具足ノ右ノ方ヲ 受取ト云

是是古より 澄と云 具足と云 といはたる 鏡搦ハ 大将平侍の

若別あり 昔今の別ありを知る

一 伊勢武名ハ皆継威ヒツトシの鑑ミタマキテ宇治の細アジロ伐キハ為ナりぬら かつ不  
 秋アキ昔平家の軍兵継威の鑑ミタマキテ宇治川ウジカハなる色イロくをえて  
 伊豆守仲綱ナガツグがよみし書カキハ活川イカガハハ氷魚ヒツナと不魚フイサ何ナニもあ  
 せて継威ヒツトシとよめる秋アキハ秋アキあきとて人氷真威ヒツトシと不威フイサ毛  
 を作り出せり仲綱の秋アキハ継威ヒツトシなる氷真威ヒツトシハ何ナニも  
 昔具足キクゾクは尚世ナカヨの具足キクゾクと云イハふ昔具足キクゾクハ前マエハ記キし繪エ画ガ何ナニも  
 けりて鑑ミタマの事コトハ尚世ナカヨの具足キクゾクと云イハふ獲トク老ロウ狛ヲ丸マなどの形カタのこころ  
 振フル楯タテを用ヨウすして右ミダマの振フル楯タテを引ヒキ合アヒせ弦ヒツをリ障サマ子シ板イタをん人の板イタ楯タテ  
 履ヒツ板イタ逆サカ板イタかともあアらうまマとて七ナナ枚マやり綱ツナを二ニツよヨる振フル楯タテを甲カウ  
もつらぬしむるもあアらうまマとて七ナナ枚マやり綱ツナを二ニツよヨる振フル楯タテを甲カウ  
ム〜〜〜  
 作りし程ほどは鑑ミタマは昔昔ありしごとく後後同同再再添添附附の念念ん  
 たりと肩かた尚尚かともおと作りし程ほどは鑑ミタマは昔昔ありし程ほどは鑑ミタマ  
 板イタを引ヒキの物モノともあアらうまマとて七ナナ枚マやり綱ツナを二ニツよヨる振フル楯タテを甲カウ  
 中中傳ツタへりう馬ウマ故コト実実記キハ具足キクゾクを人の念念ん何ナニもあアらうまマとて七ナナ枚マやり綱ツナを二ニツよヨる振フル楯タテを甲カウ  
 尚世ナカヨの具足キクゾクかともあアらうまマとて七ナナ枚マやり綱ツナを二ニツよヨる振フル楯タテを甲カウ  
 意イ仁ニ以以後後の書カキハ後後尚世ナカヨの具足キクゾクといいふありし程ほどは鑑ミタマは昔昔ありし程ほどは鑑ミタマ  
 てを中中傳ツタへりう馬ウマ故コト実実記キハ具足キクゾクを人の念念ん何ナニもあアらうまマとて七ナナ枚マやり綱ツナを二ニツよヨる振フル楯タテを甲カウ  
 尚世ナカヨの具足キクゾクハ何ナニもあアらうまマとて七ナナ枚マやり綱ツナを二ニツよヨる振フル楯タテを甲カウ  
 一 後後老ロウの事コトハ昔昔老ロウ念念と色イロ念念ハ昔昔板イタと何ナニもあアらうまマとて七ナナ枚マやり綱ツナを二ニツよヨる振フル楯タテを甲カウ



腹巻後



澤草ニ包鎧同

ハ締エ尚板ヲ鞆ヲ通ス

ケシヤウノ板

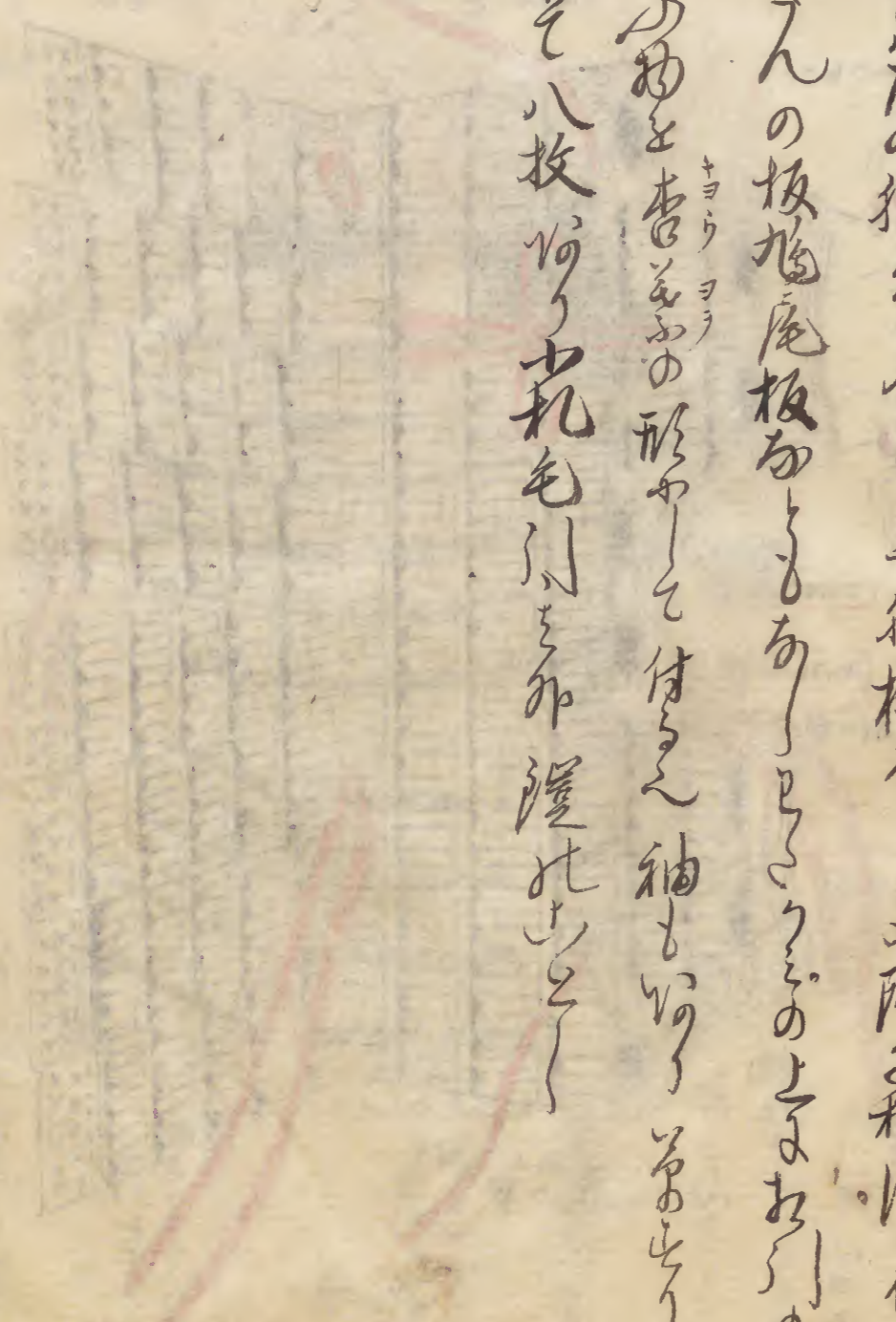
右同

澤草ニテツム鎧同ニ

尚板ニ用ヒ  
シテハ合セテ  
重キ合ハル  
振テハ  
腹巻ト何

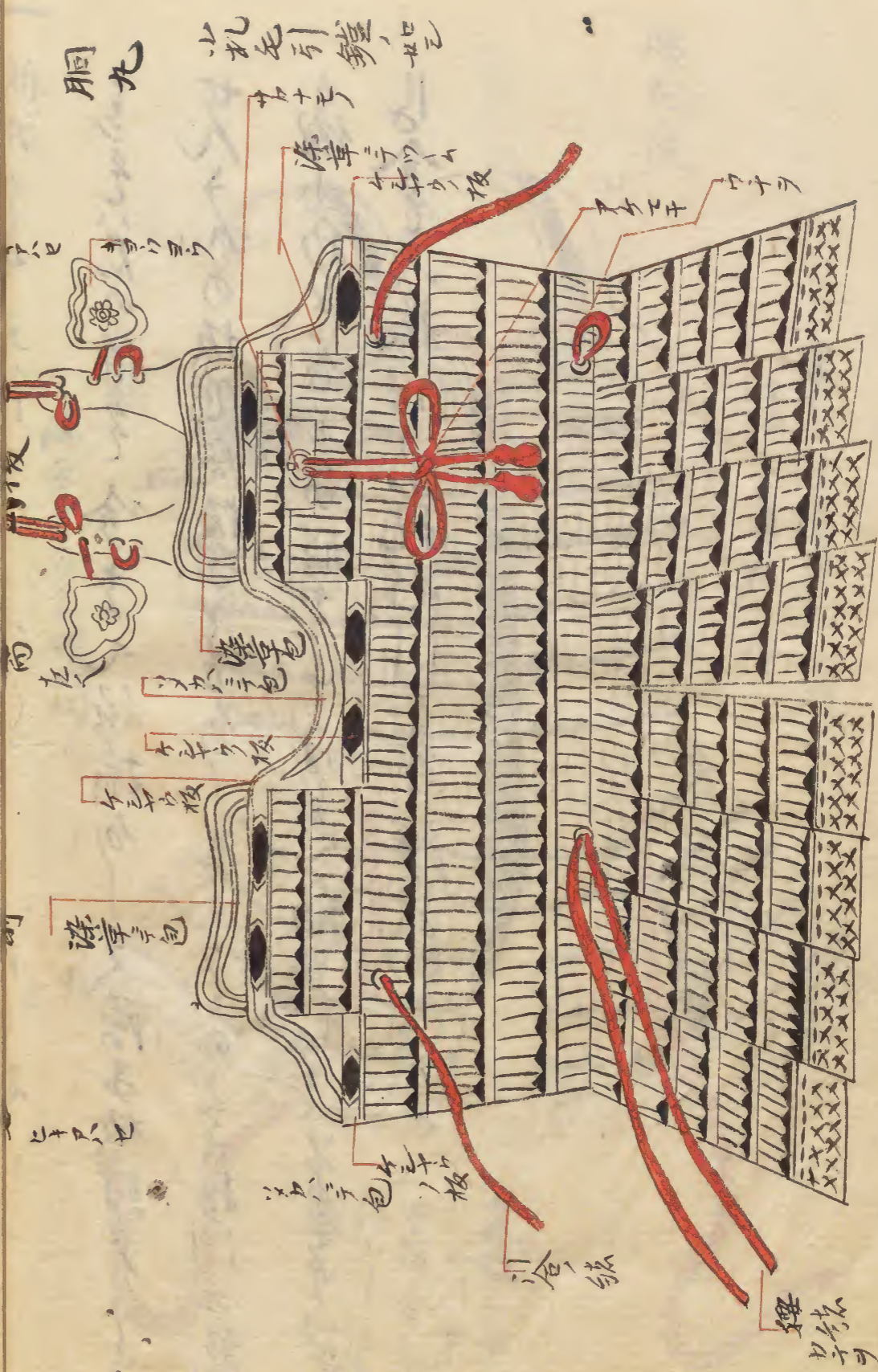
一 狐丸の事又ハ...

トシ是ハ元の振り合ハルハ  
せんうんの板指尾板也  
カヨウヨラ  
長合ハ八枚何カ札毛引...



一 當世具足の各委細名も紀

カタアテニフヒシテ袖ノ  
 コマカレ毛ハシテ付タ  
 ルモアリソレモ小ヒシト云





前



いあつひあ

惣切らうらめうらめ又これ  
 とぞんまを包と包しん  
 前存左右惣切と包しん

一 決胴の圖 又々 胴の云々 番細前記

惣切らうらめうらめ又これ  
 とぞんまを包と包しん

後



ひきあせの緒

ひか

引敷ノ草スリ

同右

ラニツケメテノサズリ

後



ひげ

ひげ

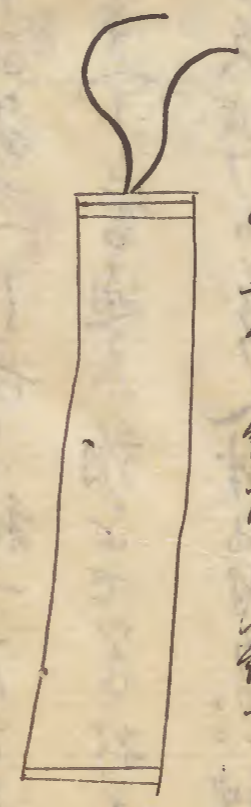
包柄と云は澄の羽  
 を包む事と包はる  
 ハ柄もあり澄ハ弦  
 たりと云前の方  
 たり澄草堂包む  
 之何色の澄ハ弦  
 たるきハあり

後当の事

後当の澄後巻おとろせよしそり種よぬ之時は用とん  
 六段解きよりん又人の物よりて澄のりよ若とる事も  
 何う暖当ハ牛皮は袖物に付けて横は長くして出さけぬ  
 たりと赤くも黒くもぬるるこも細く前よりたたの  
 振(川)ありしりぬをこをこてりりの結を結ん  
 後当のりよき後巻とふ人何う非なり後巻とふハ  
 巻巻持衣ありしハ後巻を巻く事又とふなり後巻も  
 何物別より何よりハ何れも又後当のりよきハあり



志すのふなるし 是なるも是か同しとて 神意し  
 是なるも 徳軍勢の様もさる 大將の綿糸とて 用らるる  
 書付る文字又ハ 敵をハ 徳軍勢と向しとて 是は又白  
 曹ハ 是なるも 左右の 徳軍 徳軍とて 付らると 何方を是と  
 也 敵方の方の 是らるるも 是とて 是らるる 是らるる



白竹細削り入纏

是の年

一 是なるも 一箇一幅 是なるも 是なるも 是なるも  
 又 是なるも 皮を細く 搦るも 是なるも 是なるも 是なるも  
 也 又 是なるも 是なるも 是なるも 是なるも 是なるも  
 是なるも 是なるも 是なるも 是なるも 是なるも  
 一 是なるも 是なるも 是なるも 是なるも 是なるも  
 の 是なるも 是なるも 是なるも 是なるも 是なるも  
 一 是なるも 是なるも 是なるも 是なるも 是なるも  
 一 是なるも 是なるも 是なるも 是なるも 是なるも

差込



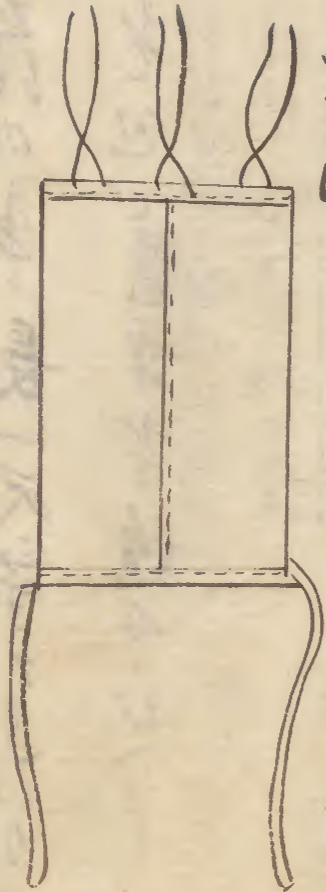
同上

一中差込の事 鎧高を旗籠不造了と云ふ上を何れ  
よま細く布と削り合のりくをふ細き紐を以て凡は前  
是れ也 堀り紐の場と甲の切込の目一付る能く其  
付る家の故より長サハ一尺一寸半長サ一尺七寸

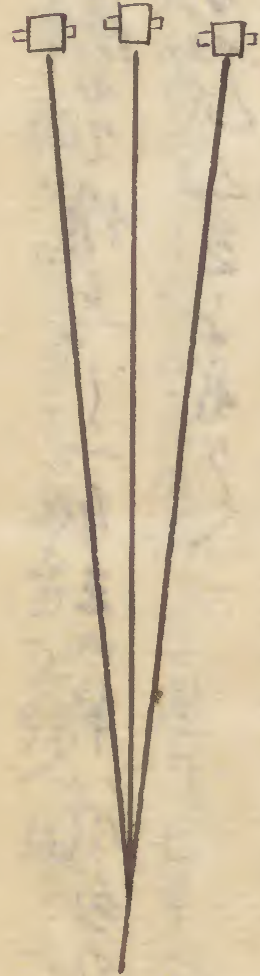
中差込

は鎧甲の目つえ

是れ云々の切込の目つえ  
能く何れと云ふ志のハ此能く  
乳又ハ合入付え

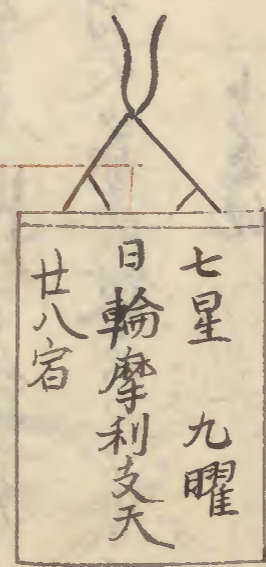


同竿



一 右の竿ハ洗めて俵多し一切之の竿ハ風呂の所ニとあり是  
 日くさつり方やびらをとりえ

一 右之流の事 長一尺一寸寸ちさり九寸ぬその本を削り冷  
 綿光包ニ藍草中絶くむしし白も何れ草入



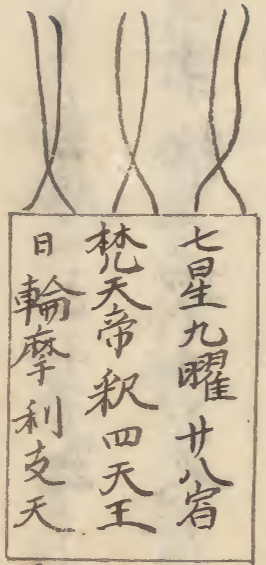
はる七寸 九て勝木ヲ結

右流文綿の時ハ文金銀せハこの時ハ黒字を用く勸請の所家  
 の文ハ...

竿



竿一尺七寸寸の能竹を削てまし藍草ひくええんるし結え



此竿強格中同前

右の竿ハ前々絶るるに却之の竿を利えん竿の根ニ入りし  
 所より一尺竿志すの正その何る通り七寸ニ

一 笠流付事 銘めの上きをある方を結へ成る中ノ銘ハ射向の事







才三 下帯 下の帯とハ少袖の上帯 才四 旺中 きん

才五 もちまき 才六 名目

才七 小巾 少袖の上帯 才八 名目 先左取右

才九 ゆび 才十 袴 袴の下の帯

才十一 名目 才十二 小大口 名目

才十三 袴 先左取右 才十四 袴 先左取右

才十五 袴 先左取右 才十六 袴 先左取右

才十七 袴 先左取右 才十八 袴 先左取右

才十九 袴 先左取右 才二十 袴 先左取右

才廿一 袴 先左取右 才廿二 袴 先左取右

才廿三 袴 先左取右 才廿四 袴 先左取右

才廿五 袴 先左取右 才廿六 袴 先左取右

才廿七 袴 先左取右 才廿八 袴 先左取右

才廿九 袴 先左取右 才三十 袴 先左取右

才卅一 袴 先左取右 才卅二 袴 先左取右

才卅三 袴 先左取右 才卅四 袴 先左取右

才卅五 袴 先左取右 才卅六 袴 先左取右

才卅七 袴 先左取右 才卅八 袴 先左取右

才卅九 袴 先左取右 才四十 袴 先左取右

才四十一 袴 先左取右 才四十二 袴 先左取右

才四十三 袴 先左取右 才四十四 袴 先左取右

才四十五 袴 先左取右 才四十六 袴 先左取右

才四十七 袴 先左取右 才四十八 袴 先左取右

才四十九 袴 先左取右 才五十 袴 先左取右

才五十一 袴 先左取右 才五十二 袴 先左取右





Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or letter. The text is written in a dark ink on aged, yellowish paper. The script is dense and fills most of the page, with some lines starting with a vertical stroke. The handwriting is somewhat slanted and appears to be from a historical period, possibly the Edo or Meiji eras in Japan. There are some faint markings and a small mark resembling a '5' at the bottom right of the page.

Small handwritten mark or signature at the bottom of the page, possibly a date or a name.

